

●水環境・河川・流域(7) (3-A-09-1～3-A-10-2)

本セッションでは、河川源流域から流出する自然系汚濁物質の発生機構や流出特性の評価に関する6件の研究発表が行われた。いずれも実験フィールドを対象とした現地調査に基づく内容であり、各々貴重なデータを用いて報告がなされた。

3-A-09-1は、出水時における源流域から河川への大腸菌の流出挙動に関する研究で、大腸菌の浮遊粒子への吸着と出水規模との関係などについての報告があった。出水時における微生物の流出挙動を把握することは下流域における衛生管理上重要であり、今後の研究にも注目したい。

3-A-09-2および3-A-09-3は、森林源流域から降雨時に流出する溶存有機炭素に注目した研究で、土壌表層での溶出に対する変動要因の分析結果、およびその結果をふまえた流出モデルの検討結果が報告された。森林域においては、土壌以外にも樹木自身が溶存有機炭素の主たる発生源として寄与していることも想定され、フロアとの間で活発な意見交換が行われた。

3-A-09-4は、森林河川中の粒状有機炭素の流下挙動に注目した研究で、SS中に含まれる有機炭素量の変動要因などについて報告がなされた。河床生物との交換が河川中のPOC濃度に影響しているなど、天然有機物の挙動を知る上で興味深い指摘がなされた。

3-A-10-1は、谷川岳連峰における近年の気候変動に伴う自然環境や水環境の変化に関する調査報告で、約20年にわたる調査結果が示された。調査地点は山頂付近にも及び、平均気温の上昇、融雪期の早期化、鶯初鳴きの早期化、水質の変化などが定量的に示され、大変貴重なデータを用いて有意義な講演がなされた。

3-A-10-2は、ナラ類の樹木がカビにより枯死する「ナラ枯れ」に注目した研究発表であり、周辺の溪流水質への影響などが報告された。この影響は長期水質モニタリングによって明らかにされ、森林域における樹木の生育状況と水質との関連性が的確に指摘された。

会場はほぼ満席に近い状態で、フロアからの質疑も活発に行われ、発表された研究分野への関心の高さがうかがえた。

(大阪工業大学工学部 笠原 伸介)